

つれづれぐさ

けんこうほうし

徒然草

兼好法師

【作者】

兼好法師は、鎌倉時代後半の1283年ごろ、京都に生まれました。若いころは朝廷に仕えていたと言われますが、30歳ごろ出家、和歌を詠んだり、旅をしたりして過ごしたようです。

【作品】

兼好法師の随筆集が『徒然草』です。作者の人生観がうかがえるほか、鎌倉時代終わりの社会を知ることができます。住まい、趣味、逸話、人間観察など様々な題材が取り上げられています。

《序段》全体の執筆姿勢がうかがえる文章です。心に浮かんだり消えたりする思いを書いてみよう、と述べています。

《第五二段》仁和寺の法師が、京都南方の男山にある有名な神社に行ったものの、麓の付属神社だけを拜んで帰ってきてしまったというユーモアのあるお話です。

《第一一七段》理想の友達について述べています。

「よき友は知恵ある人に医師なりさてその上は物くるる友」

《第一二三段》幸福のための条件は、衣食住と医療、とあります。

序段 じよだん

つれづれなるままに、日くらし硯にむかひて、心こころにう
つりゆくよしなし事ことを、そこはかとなく書きつくれば、あ
やしうしゆうこそものぐるほしけれ。

第五二段 だいごじゆうにだん

仁和寺にんなじにある法師ほうし、年としよるまで、石清水いわしみずを拜おがまざりけれ
ば、心こころうく覚えて、ある時とき思おもひ立ちて、ただひとりかちよ
り詣もつでけり。極楽寺ごくらくじ・高良こうらなどを拜おがみて、かばかりと心得こころえ
帰かえりにけり。さて、かたへの人ひとにあひて、「年とし比ころ思おもひつる
こと、果はたし侍はべりぬ。聞ききしにも過すぎて、尊とうとくこそおはしけ
れ。そも、参まいりたる人ひとごとに山やまへのぼりしは、何事なにことかあり
けん、ゆかしかりしかど、神かみへ参まいるこそ本意ほんいなれと思おもひて、
山やままでは見みず」とぞ言いひける。
少すこしのことにも、先達せんだちはあらまほしき事ことなり。

第一一七段

友とするにわろき者、七つあり。一つには、高くやんごとなき人。二つには、若き人。三つには、病なく身強き人。四つには、酒を好む人。五つには、猛く勇める兵。六つには、虚言する人。七つには、欲深き人。

よき友三つあり。一つには、物くるる友。二つには、医師。三つには、智恵ある友。

第一二三段

無益のことをなして時を移すを、愚かなる人とも、僻事する人とも言ふべし。国のため、君のために、止むことを得ずしてなすべき事多し。その余りの暇、幾ばくならず。思ふべし、人の身に、止むことを得ずしていとなむ所、第一に食ふ物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つには過ぎず。饑えず、寒からず、風雨にをかされ

ずして、閑しずかに過すぐすを樂たのしみとす。ただし、人皆ひとみな病やまいあり。
病おにかされぬれば、その愁うれえし忍しのびがたし。

医療いりようを忘わするべからず。薬くすりを加くわへて四よつつの事こと、求もとめ得えざるを貧まずしとす。この四よつつ欠かけざるを富とめりとす。この四よつつの外ほかを求もとめ営いとなむを驕おごりとす。四よつつの事こと儉けん約やくならば、誰たれの人ひとか足たらずとせん。

★テキストは、『新編日本古典文学全集44』（小学館）のテキストをもとに一部加工しています。

★図書館で読むには

『徒然草』（角川ソフィア文庫）

*2002年版と2008年版の2種類あります。

『新潮古典文学アルバム（方丈記・徒然草）』（新潮社）

『徒然草』（ちくま学芸文庫）

『徒然草（新潮CD）』（新潮社）*耳で聞けます。